秋田労災病院通信 No.154 平成28年11月発行

口腔ケアでくも膜下出血予防を

脳神経外科 部長　**神里　信夫**

頭蓋内脳血管の検査が比較的容易に行えるようになり、未破裂脳動脈瘤が発見される機会も多くなった。最近はこの未破裂脳動脈瘤の自然経過の解析も多く報告されている。それによると、未破裂脳動脈瘤全体の年間破裂率は1%前後とされ、さらに脳ドック等でみつかる小型未破裂脳動脈瘤（5㎜以下）では、年間破裂率0.54%とされている。

では、破裂しやすさの危険因子としてはどうでしょうか？ **①年齢が50歳未満の若年者、②動脈瘤の直径が4㎜以上、③多発性脳動脈瘤、④高血圧症合併例、⑤喫煙者（特に女性で）、⑥アルコール多飲者、⑦スタチン製剤未服用者** などが挙げられている。

さらに最近興味深い研究が取り上げられている。生活習慣病として、歯周病が取り上げられてきたが、なんとこの歯周病菌が脳動脈瘤の破裂にも関与していると、注目されている。

口腔内常在細菌は、もともと菌血症を起こしやすいことが知られている。その中でも齲蝕原性菌（虫歯菌）であるStreptococcus mutansの一株がCnmといわれる蛋白結合能を有しており、血小板凝集を抑制し、血管床のコラーゲンを融解、脆弱化させることがわかってきた。実際マウスでの実験では、S.mutansの菌血症やリコンビナントCnm蛋白の血管内投与により、脳内に出血性変化が見られている。聖隷浜松病院の田中先生らのグループによると、くも膜下出血で運ばれた破裂脳動脈瘤患者43例中S.mutans保菌者30例で、さらにCnm蛋白陽性者は10例（23.3%）と高率であった。ちなみに、正常ボランテイでの頻度は51例中S.Mutans保菌者は30例で、かつCnm蛋白陽性者は4例（7.8%）であった。未破裂脳動脈瘤患者で調べると、97例中S.mutans保菌者が55例、Cnm蛋白陽性者が8例（8.2%）であった。この結果から、歯周病菌 S.Mutans Cnm蛋白陽性菌が脳動脈瘤破裂イベントに何らかの関与、影響を及ぼしていることが強く示唆されたと報告している。

お口はやはり健康のミナモトである。シッカリ食事を摂り、口腔ケアも忘れずに行い、健康な生活を送りましょう。